九共大紀要
第3巻　第2号
2013年 3 月

[原著論文]

河原操子についての一考察

包　賀喜格図*

A Consideration of Kawahara Misako

Hexigetu BAO*

Abstract

Kawahara　Misako is the first Japanese woman teacher who went to China for educational support in the late Qing Dynasty from 1901 to 1911. Under her father's influence, she made up her mind to be engaged in the education of Chinese women. She taught in the Daido School of Yokohama of Japan, the Wuben Female School of Shanghai, and　the Yuzheng Female School of Inner Mongolia successively. There are more than fifty articles and chronicles on Kawahara　Misako, which mainly make negative comments on her identity as a spy. In recent years, the positive comments on her contributions to the development of modern female education in Inner Mongolia are increasing gradually, which means certain change in comparison with the former overwhelmingly negative comments on her identity as a spy.

After carefully observing the two recognitions of her identity as a spy and her contribution to education, it can be easily seen that the former emphasizes on the political background and her support for the war at that time while the latter focuses on her educational contents, educational contribution and her positive influence upon the later generations. It is hard to conclude that she is a spy according to the present historical data. However, it is necessary to have a further ponder and probe into the following problems: Why was she engaged in the female education of China? Why was she determined to accept the task of going to Inner Mongolia? Why did she do the work for supporting the war? Why did she have the seemingly conflicting features: to support the war and to teacher for peace? By researching in the educational environment and family background　which she experienced in the special Meiji Period and her words and deeds in different periods, a relatively real Kawahara　Misako can be seen.

This paper starts from the background that the educational ideology of nationalism was predominated by the continental policy of Japan in Meiji period. Then it investigates and analyzes the educational activities of Toadobunkai in China, particularly its function in establishing the Yuzheng Female School, the nationalistic educational ideology of Kawahara　Misako and her recognition of the education of China. Eventually, it attempts to explain the reasons for her two ideologies of different natures.

KEYWORDS : Kawahara　Misako, nationalistic educational ideology, educational activities of Toadobunkai in China, Yuzheng Female School, educator, supporters of the war

＊内蒙古大学外国語学院　　＊Foreign Languages college of Inner Mongolia University

はじめに

河原操子（以下河原に略す）は日本人女性として最初に中国（当時は清末新政期）で女子教育に携った女性教習の先駆者としてよく知られている．河原は父の影響で中国人女子教育に興味を持ち，そして中国へ行って女子教育の事業を起こしたいと思っていた．彼女が教鞭を取った学校は日本国内には横浜大同学校があって，中国大陸には上海務本女学堂，内蒙古カラチン右旗の毓正女学堂があった．河原についての文章や記事は日本と中国でたくさんあるが，その河原に対する評価は昔から「スパイ・間諜論」[1] に集中している一方，近年内蒙古地方の初等女子教育の貢献者としての研究[2] も多く見られるようになった．

これら「スパイ・間諜論」と「貢献者」の評価の研究を見ると，前者は侵略戦争という政治的な背景や河原の戦争協力の活動そのものを強調している傾向があって，後者はもっぱらその教育内容，教育貢献及び後世への積極的な影響に注目しているような気がする．河原がスパイであるかどうかについて，今までの史料だけでは確かに論断を下しがたいが，しかし，彼女はなぜ中国人女子教育者になりたかったのか，なぜ「敢然と」入蒙の選択をしたのか，なぜ戦争協力の活動をしたのか，なぜ彼女一身に戦争支持の姿と平和友好のための教育者の姿が同時に存在したのかなどについて，もう一度その育った明治時代の特殊な教育環境や家庭環境の角度から，彼女自身の言動を細かく考察することによって，河原のその時代の中の本当の姿がある程度見えてくるのではないかと思う．本稿は，明治時代の大陸政策の下にあった国家主義教育思想と東亜同文会の対中国教育活動，特に毓正女学堂の成立に与えた力，またこの中の河原個人の国家主義教育思想や対中国教育認識などの分析を通して，河原の身に集まった多面性のことを究明したいと思う．彼女の真の女子教育者の姿が認められると同時に，その戦争協力者の姿についても，明治後期から第二次世界大戦終わりまで続いた国家主義下の日本国家と日本人個人との関係からもっと深層的に考える必要があると思う．

1，河原操子の中国へ赴く背景と理由

（1）河原操子について

河原は1875年に信州松本で生まれて，家は松本藩の藩儒の家庭で，代々学者が続いた．父の河原忠は松本の藩士で，儒者として戸田候に仕えていた．廃藩後，西町に家塾を開いて子弟の教育をしていた．母のしな子は松本の旧家丸山武左衛門の三女，「至極温順な人」[3] で，河原14歳の時に亡くなった．父の河原忠は「一人娘の操子を継母の手にかけまいとの同情」[4] から，40歳以後は再び結婚せず，孤独の一生を送った．

河原は8歳の時開智学校に入って，1890年に県立の師範学校女子部に入学した．19歳の時課程を終えて，二年間母校に残って，附属小学校の教鞭を取った．日清戦争勃発後，東京へ出て学問を学ぼうと思って，東京女子高等師範学校の入学試験に合格して，1895年3月に上京した．二年生の時，風邪で肋膜炎にかかって千葉県の千倉の海岸で1年近く静養したが，学校へ戻ってから病気が再発して，やむを得ず学業を断念した．故郷に帰ってまもなく長野県立の高等女学校へ数学や理科や歴史などを教える機会を得て，体も回復した．

1900年，河原は当時信越地方へ講演旅行をする華族女学校の下田歌子に会った．下田に「支那へ渡って教育事業を起こしたい」と希望を述べたところ，「力になってあげる」と言われた．その後まもなく，下田の推薦によって，1900年9月22日から横浜大同学校の教壇に立った．そして，1902年8月，今度もまた下田の推薦で丸二年勤めた大同学校を退き，9月に上海務本女学堂へ赴任した．務本女学堂での仕事が1年間続いた後，1903年11月上海を離れて同年12月21日に内蒙古カラチン王府に入った．カラチンにおける教育事業は二年余り続いて，1906年2月に日本に戻った．1906年7月に横浜正金銀行の一宮鈴太郎と結婚式をあげ，10月に夫婦二人アメリカへ行った．その後平凡な主婦生活を送ったが，1909年に『蒙古土産』などの著書を出したりして，蒙古での経験を語った．1945年3月に亡くなった，享年71歳であった．

（2）河原操子の国家主義教育の背景

河原の小学校からの学生時代とその後の教師の経歴はちょうど当時明治政府の国家主義教育の正式な提唱から確立までの歩みと重なっている．日本近代の国家主義教育体制を形式上確立したのは『教育勅語』（1890年）の発布である．その前の準備期として森有礼の国家主義教育の実施模索があって，その発布後は

伊澤修二を会長とする国家教育会の国家主義の宣伝，日清戦争の勝利による日本国民の国家意識，日本人意識の高揚，また中国の義和団事件の時の日本派兵による列強の一員になるという国家的な自信の獲得など，これらの一連の内因が連続的に働いて，1905年の日露戦争で日本は大勝し，国家主義教育は不動の地位が確立された．河原の1906年内蒙古から帰国した時点までの経歴はまさにこの日本の国家主義教育体制の完全確立までの全過程に包括されている．

明治天皇の『教育勅語』の主旨は「教育は一切国家のため」や「忠君愛国」にあり，これを国民教育の根本の位置に置いた．前述したが，森有礼は伊藤博文の支持を得て，1885年から初代文部大臣としてドイツをまねて「学政要領」「小学校令」などの教育令の発布を通して国家主義教育の実施の試みを展開した．彼は「学術は学術のための学術にあらずして国家のための学術なり，教育は生徒その人のためにあらずして国家のための教育である」[5] と唱えた．河原操子の小学校時代に受けた教育は主に森有礼のこの国家主義教育だったと思える．河原の「国家のため」「忠君愛国」の意識はこの時期に既に芽生えたと思う．

河原の長野県立師範学校での勉強とその附属小学校の教鞭を取っていた時期は伊澤修二の国家教育会の国家主義教育宣伝の時期とほぼ一致するが，国家教育会の宣伝はどれほど河原に影響を与えたか実証的な研究はまだ見られないが，日清戦争の勃発は確かに彼女に刺激を与えたということがその回想録から分かる．「日清戦争が勃発いたしまして，私もじっとしておられない気持ちになり，東京へ出てもっと学問を積まなければならぬと考えまして，長野の県庁で女高師の試験を受けてみましたところ，合格して入学を許されましたから，明治28年3月21日の春に上京いたしました.」[6]．そして，「何分大国を相手の戦争で，はじめのうちは心配しておりましたが，日本軍の連戦連勝によって国民の意気が大いにあがり，私たち女高師の生徒も夕食校庭の藤棚の下に三々五々集まって，あの「婦人従軍歌」を毎日のように歌っては，云い知れぬ感激に浸っておりました．やがて両国間の平和が回復されまして，その年の5月，両陛下が京都の大本営から還御遊ばされましたのを二重橋の前に整列してお迎えいたしたことを覚えています.」[7] と，戦争中の心情を述べている．国のため進んで学問を学ぶ，国の戦争勝利に励まされて国に献身する覚悟をもつようになるということは，国家主義教育の効果が河原を含む女高師の生徒たちの反応に大いに反映されたと思える．この時の河原は既に随時国のために献身する意志の持ち主になっていたと言えるだろう．

（3）河原操子の中国へ赴く個人的な理由

河原が中国へ渡って「教育事業を起こしたい」という強い意志をもったのは，国家主義教育の環境の中に育ったのが一つの要因になるが，もう一つ大事なことは幼い頃からの父親の影響にあると思う．

前述したように，父の河原忠は儒学者で，中国に親しい感情を持っていた．河原の回想に，「その時分は政治家にしても学者にしても，漢学を重んじていましたから，昔の支那崇拝の思想がどこかに残っていて，決して支那を馬鹿にしたりはしませんでした．日本と支那とが手を握って，東洋に平和をもたらすためには，支那の事情を研究するとともに，温かい心で支那人に接してその信頼を受けねばならぬ――というのが父などの持論のようでありました.」[8] と父の立場を述べている．河原は幼い頃からずっと父の「日中親善説と教育尊重論」に薫陶されていた．「日中親善の必要性」と「国家百年の計は教育にあり，国を富ますも，強くするも根本は教育だと，口癖のように申していました」[9] という父の言説の影響について，「子供の私に難しい理屈の分かろうはずはありませんが，とにかく，支那と仲良くするのが御国のために大切だというような考えが自然に頭の中に浸み込んでいったものと見えます」[10]，また「私が女高師に入学するようになったのも，この父の考え，教育は国家のために何よりも大切な仕事である，その大切な神聖な道に従事するのは有難いことだ，という意味のことが女学生時代の私の頭にいつとなくしみ込んでいたからだと存じます．そして女高師に入学してからも，将来はどうか支那婦人の教育に従事したいという希望を抱くようになったのであります」[11] と河原操子が回想している．そして『カラチン王妃と私』という本の中にも，自分の入蒙の理由について，「父の日中親善説と教育尊重論に導かれた結果ですから，中間には下田歌子先生や内田駐支公使や，其他多くの方々の御厚配やご尽力がありますけれども，根本はやはり父の感化だと申してもよいと存じます」[12]，「父の主義思想が私という女を作り上げた」[13] と書いている．

こういう父の「主義思想」の他に，「母を失いまして，親一人子一人の淋しい暮らし」[14] も河原のぜひ中国へ渡って教育事業をしたいという希望の大事な理由になるのである．父河原忠は「友人の福島安正将軍がシベリヤの単騎遠征に成功なすつたり，同郷の川島浪速さんが支那で盛んに活動しておられる様子を望見して，「若ければ自分も支那に行くのだが…」と，口癖のように申しておりました」[15]．自分のために孤独の生活をしてきた父，中国へ行って何か事業をやりたかった父のために，「何とかして父を慰めてあげたい，喜ばしてあげたい，といったような気持ちがなにかにつけて働いておりました．ですから，その機会に恵まれまして，私が支那へ渡り蒙古へ参りましたことは，親孝行と言ってはなんですが，し遂げなかった父の志を継いだような形にもなっております」[16] と河原は考えていた．中国での教育活動を通して日中親善のために，親孝行のために何かをやるという素朴な気持ちは河原の中国へ渡る主な理由となった．

このように，河原は幼い頃から国家主義教育と父河原忠の「日中親善説と教育尊重論」の影響を受けてきたので，中国へ教育事業を起こす切なる希望を持つようになった．国家主義教育からは「国家のために献身する」意志，父からは「教育を尊重，中国と仲良くする」という認識を身に着けた．これは彼女の後の上海と蒙古での教育事業の成功につながった．

2，河原操子の上海と蒙古へ赴く裏の力――下田歌子と東亜同文会

河原自身が前述の中国へ行く強い意志をもつ以外に，裏でその機会を作るために尽力した人物や団体も重要である．本稿において特に取り上げたい人物は当時日本の女子教育の第一人者であった下田歌子[17] のことで，団体は日清戦後「中国を保全す」ことを盛んに唱導した東亜同文会のことを指す．

（1）上海務本女学堂への赴任

下田歌子は国家主義教育の支持者，実践者であると同時に，中国人女子教育の指導者でもあった．紙面の関係で，この面の論述は，拙文『下田歌子と内蒙古の近代女子教育について―内蒙古カラチン右旗毓正女学堂の設立を中心に―』を参考されたいが，河原操子の下田歌子についての次の評価からも下田が如何に中国人教育に関心を持っていたかがわかる．「あまり世間に知れておらないようでありますが，下田先生は，支那問題に大きな関心を持っておいでになった当時唯一の婦人であられまして，革命家の孫逸仙と交際をされたり，西太後と連絡を御取りになったり，ご自分で支那語の研究会をお作りになったり，実践女学校で支那の留学生のお世話をなすったり，清国派遣女教員のための講習所をお設けになったり，東洋婦人会の創立にお加わりになったり，それは支那問題のために尽くされたものでありました．残念なことに先生のおそばにおりませなんがために，詳しいことは存じませんが，こうして箇条書きにして並べてみただけでも，下田先生の深い見識と高い抱負の幾分かがお分かりになるでありましょう．」[18]

国のための女子教育，中国を扶助する教育を唱導する下田歌子は，河原にとって憧れの存在であった．こういう同じような教育認識から生まれた憧れに駆られて，河原はついに下田の信越地方訪問の際会いに行くことにした．「中国へ渡って教育事業を起こしたいと将来の希望を述べます」[19] と，下田は「それは日本にとって大切なことである．私もできるだけ力になってあげるから，体に気を付けて学問を励むように」[20] と答えてくれた．河原は「温かい言葉でもって同情と激歴を与えてくださいました」[21] とたいへん満足していた．対中国教育観の一致が両者を結びつけたと言えるだろう．

下田に会ったのは1900年8月19日，その日から間もなく下田から招かれ，河原は1900年9月22日に横浜大同学校女子部の教師になって，中国人女性を教えることになった．これは河原の中国人教育という旅の起点と言うべきである．横浜大同学校で丸二年間勤めて，今度は上海務本女学堂へ行くことになった．これも下田の推薦であったが，その前に上海の務本女学堂の呉懐疚氏から「適良なる」女教師の紹介依頼が来ていた．この時の河原は下田の要求した「意志の強固な，忍耐力のある，常識の円満に発達した女教師」[22] という条件を満たした人選と見られて，中国人に対する教育経験がある程度積めて，中国語も少し話せるようになった．

（2）内蒙古カラチン王府への赴任

上海に行って中国婦人教育を行うという宿願を叶え

ることができたのは，下田の推薦によるところが大きいことは否定できないが，犬養毅（東亜同文会会員，横浜大同学校名誉校長）から，大同学校に新設された女子部に日本人女教員を採用したいという依頼があったからこそ，はじめて河原の中国人教育事業がスタートできたということを振り返ってみれば，実は東亜同文会は河原の中国人教育事業の最初からもう既に力になっていたことが分かる．

東亜同文会は日清戦争の中日両国にもたらした大きな影響の中に誕生した団体である．日清戦後，東亜の状況が変わり，欧米列強は争って中国に租借地を求め，鉄道，鉱山などの利権を手に入れていた．日本も傍観してはいなかったが，欧米列強の勢力に圧倒されていた．特にロシアは1896年に清国と「露清同盟密約」を締結し，満州の実質的占有を企図していた．そしてその後の南下政策として大連，旅順の25か年租借及び南満州鉄道の敷設権と同地区の鉱山権などを得て，さらに朝鮮にも進出しようとした．こういう列強の中国分割競争に伍していけないこと，とくにロシアに対抗できないという状況の中に，日本は自分の「利益線」[23] への脅威を強く感じて，中国の存亡は日本の安危にもつながると思って，中国と連携してロシアに対抗しようとした．

一方，中国も日清戦争の敗戦に刺激されて，「近者日本胜我，亦非其将相兵士能胜我也，其国遍设各学，才艺足用，实能胜我也」[24]，「亡而存之，废而举之，愚而智之，弱而强之，条理万端，皆归本于学校」[25] のような教育面の反省が有識者の認識となって，ついに1898年7月に，西洋より日本を学ぶのが上策だという旨の張之洞の『勧学篇』が朝廷に認められるようになった．このように，日清戦後から辛亥革命までの十数年間に中日両国教育交流の「蜜月期」が続いた．こういう日本の危機感と中国側の日本を学ぶ風潮に応じて，1898年11月2日に，近衛篤麿が会長となる（東亜会と同文会を合併した）東亜同文会が発足した．

東亜同文会の各事業の中で教育事業が重要視されていた．「中国を保全す」の方針，「中国の富強」と「日中提携の基礎を固めるため」というスローガンの下で，東京同文書院，東亜同文書院（前身は南京同文書院）などが作られた．東亜同文会及びその中国における教育事業に対する研究結果が様々で，「侵略」と見ているのもあるし，その教育実績を「評価」する意見もある．さらに，「侵略」と「評価」を共に認めるべきだという「二面性」の見解も出ている[26]．蔡（2009）の研究は東亜同文書院の人材養成に注目して，その卒業生の就職進路，活躍した分野などの分析をした．この分析に踏まえて，「「人材養成」において最も力を入れたのが，中国進出に積極的に活用できる外交分野と経済分野であった．このことから，東亜同文書院の史的位置づけを，既存の「教育」という認識から脱皮し，新しい方面から見直さなければならないと思われる．無論，東亜同文会の中国教育事業におけるすべての活動を，侵略であるとは言い切れない部分もあるが，過程と結果から見れば東亜同文書院は，日本政府の中国進出の拠点として利用されたことが大きい」[27]，「中国教育事業の一環として成された東亜同文書院の教育活動は，アジア連帯及び中国親善などの美名の下で行われたものの，決して日中両国の連帯と繁栄をもたらすものではなかった．無論，東亜同文書院の出発は隣国からの心情的な共感と，連帯的な視覚の中で支持と称賛を受けたが，活動の過程と内容においては中国侵略の暗い影でもあった」[28]，「同書院は日本の国家利益に符合する人材養成，或いは中国大陸で活動できる日本人の人材養成を目的として設立された教育機関であり，さらには「諜報要員」の養成所でもあったと言うべきである」[29] と鋭く指摘している．

蔡（2009）の論述は東亜同文書院に限っているが，同書院の東亜同文会教育事業の中の地位，その存在する時間，卒業生の人数や活躍した分野などを総合的に見れば，在中国教育事業の根幹になっていることが分かる．ここからこそ東亜同文会の対中国教育策略の一面，つまり教育を手段として大陸に浸透し，相手国の事情調査とともに相手国民の精神面の支持を得て，ロシアをはじめとする欧米列強との対抗の中に優勢に立ち，最後に大陸進出を実現するという企てが見られると思う．東亜同文会のこの教育浸透戦略は東亜同文書院だけではなく，日露戦争前の内蒙古のカラチン右旗にもその足跡が見られるのである．

河原が入蒙する経緯については拙文『下田歌子と内蒙古の近代女子教育について―内蒙古カラチン右旗毓正女学堂の設立を中心に―』に説明があって，重複を避けたいが，ここでその補足として特に強調したいのは東亜同文会がその裏の一大推進力だったということである．まず毓正女学堂の設立に直接関わった人物の名前を並べてみると，川島浪速[30]，佐々木安五郎[31]，

内田康哉[32]，小田切万寿之助[33]，下田歌子，福島安正[34]，青木宣純[35]，伊藤柳太郎[36]などがあって，教育者の下田歌子と陸軍軍人の福島安正，青木宣純，伊藤柳太郎を除けば全員東亜同文会の会員だということが分かる．

これらの人物の中に川島浪速（以下川島に略す）が中心的な役割を果たした．彼は陸軍少将福島安正と同郷で，昔初めて中国へ行こうとする時に福島から資金の援助を受けたことがある[37]．また彼が義和団事件の時，日本派遣軍従軍の通訳官として北京にきたのも福島からの求めがきっかけだったのである[38]．こういう福島との関係から，川島と日本軍部との関係も緊密であった．1902年から1903年にかけて，川島は日本駐清公使内田康哉，公使館附武官青木宣純陸軍大佐と「極秘のうち屡会合し」て，貢王の日本への渡航を計画した[39]こと，また，毓正女学堂の設立後，内蒙古へ派遣された特別任務班の「班員の一半は皆川島の手によってできた志士である」[40]ということなどの事例から考えれば，確かに川島が内蒙古と日本，特に軍部の間になくてはならない大事なつながりの役割を果たしていたことがわかる．軍部方面の他に，当時上海総領事の小田切万寿之助とは外国語学校時代の同学であったり，河原とは同郷の関係もあり，東亜同文会の対内蒙古工作にとって，川島はまさに大事な存在であった．

一方，内蒙古と川島の間にある人物は清朝の大官粛親王であった．粛親王は親日主義の人で，「中国はどうしても日本と緊密な提携を結ばなければ，自国を保全することも，東亜の大局を安定させることもできない」[41]という東亜同文会と同じような政見をもっていた．川島は彼と義兄弟の約をなして，二人は「一身同体の如くに働き，お互いに相助けていた」．粛親王の王妹が内蒙古カラチン右旗の貢王[42]に嫁いだ為，川島は粛親王を通して内蒙古方面との連絡ルートを持つようになった．

当時，「日露戦争前，内蒙古方面に出入する者は殆ど絶無であったと言ってもいい有様」[43]の中に，川島の妹婿である佐々木安五郎（東亜同文会会員）は，「明治三十五六年（1902，1903）頃から蒙古のカラチン王の知遇を得て屡内蒙古の東部に出入し，頻りに何事かを画策していた」[44]という．これは言うまでもなく，「川島と粛親王の関係，粛親王とカラチン王の関係などよりして，佐々木の蒙古入りには幾多の便宜があった」[45]というわけであるが，その時期を見ると，ちょうど貢王の渡日と毓正学堂設立前の時期にあたるのである．

佐々木の蒙古入りについては，前述の1902年よりも早い，1901年の記録も残っているのである．『日本とモンゴルの100年』の中に，「佐々木安五郎，土倉鶴松の支援を受け，中川宗之助，岩崎鉄彦と，カラチン王府を訪ねる」[46]と記されている．同年，「伊藤柳太郎大尉，北京にてカラチン王と，日本人教師の派遣を約す」[47]という記載もあるが，貢王が崇正学堂を作る前から日本側の対内蒙古工作が既に始まったことがわかるのである．

川島と佐々木の活動の他に，東亜同文会が積極的，且つ計画的に対内蒙古工作を進めていたことの証拠として挙げられることがある．一つは1903年3月23日牧巻次郎から近衛篤麿に宛てた書簡[48]のことであるが，中には，貢王の渡日と「近来露国が蒙古王公に対する懐柔政策は着々として成功致居候模様にて」などの情報を報告していて，最後に「尚委細は川島氏より御聞取被遣度，御内報迄如此に御座候」と書いてあった．会長の近衛篤麿も注目していたことが窺えることで，対内蒙古工作は決して川島や佐々木などの個人的な行動ではなく，東亜同文会団体としての組織的な行動だと判断できると思う．もう一つは，1903年5月の東亜同文会春季大会の時，幹事長根津一の事務報告の「会員」の部分に，「特に今回新たに清国戴振，粛親王令息，カラチン王，蒙古王各殿下の本会名誉会員たるを承諾せられたるは本会の幸栄とする所より」[49]と明記されているが，これは貢王訪日直後のことで，東亜同文会からの蒙古王公籠絡策が如何に行き届いているか読み取れるのである．

まさに横田素子（2005）の中に「このように，貢桑諾爾布の渡日は日本の外交部，軍部，政界，財界を巻き込んでの一大事業であったことが窺える」[50]と指摘したように，東亜同文会は各方面の会員勢力を動員して，日本勢力の内蒙古進出に努めたのである．

3，教育現場から見た河原操子

（1）女子教育者としての河原操子

前述したように，河原は父からの「日中親善」の影響が大きかった．日清戦争後，日本人の中国に対する蔑視がエスカレートする中で，河原は中国に対して嫌な思いを抱くことはなかった．自分の考えが他人と違うということについて，「この日清戦争から受けた感銘は，私の心を一層深く支那に結びつけてくれたようでありました．みんなで卒業後の理想を語り合うような時なども，大抵の人は本校に残りたいとか，英語を勉強したいとか言っておりましたが，私一人だけは，支那語を勉強するつもりだと言って，みんなに笑われたり怪しまれたりしていました．（東京女高師の時の話―筆者）」[51] と述べている．またどんな態度で中国人生徒と接したらいいのかについて，大同学校在職中の感想として，「日清戦争後まもなかりし当時，我が国人は彼らに対して，要もなき場合にまで優者の態度を示すが常なりしため，先ず彼らの感情を害し，たとえ衷心より同情して親切の意味にてなせることに対しても，彼らは感謝せずして反感を抱くが常なりき．この実例を屢目にする我は，かかる有様にては到底彼らを善導すること能わざるのみならず，日支提携して東洋永遠の平和を保持することなど全然望みなければ，願わくは一度彼の本土に赴き，その家庭内にて非常に勢力を有する婦人と，女同士の親交を重ね，その方面より男子の努めらるる事業を助け，内外協力して，国運の伸張と人類の平和を増進せばやなど，柄にもなき大望を抱くにいたりぬ.」[52] と言っている．善意を抱きながら中国人と接するべきだと表明したと同時に，自分の中国人女子教育の大きな友好平和の目標のことを披露している．

「実をいうと，私は支那人を導くとか教えるとか言うよりも，支那について勉強したい心で一杯でした」[53] という中国に対する尊重のもとで，横浜大同学校にいる河原操子は着々と中国大陸での教育の準備をしていた．「支那へ渡るために先ず支那語を覚えておきたいと思って」[54]，大同学校の教頭鐘先生について支那語を習い始めた．中国語の他に「支那に渡るにしても，そこでは西洋人と顔を合わさなければならない．日本人として彼らにひけめを感じないために」[55]，フランス語の勉強も始めたのである．

言葉の準備の他に，横浜大同学校での教育実践の中で，中国人向けの教育はどんな方法でやった方がいいのかについても真剣に考えていた．「清国人を教育するには，悠々迫らざる寛裕の態度が必要なることなり．また一般清国人に対しては，抑圧することなく，さりとて寛大に過ぎず，中庸を得ることが万時に成功する秘訣なることを悟りぬ」[56] と言って，さらにその教授法について，「私の受持ちは日本語で，小学校の読本を使って教えましたが，教育効果からいうと，編み物の方が成績を挙げていました．つまり，目に見えない学問の進歩よりも，襟巻ができたとか，靴下が編めたとか，具体的に目に見えてくるものを喜ぶ，と云った風のあることが分かってきました」[57] と考えていた．こういう手工の授業が後の上海や内蒙古にもあったが，ずいぶん役に立ったと言える．

河原が上海務本女学堂で担当したのは日本語，日本文，算術，唱歌，図画であった．「生徒は皆これ等に少なからぬ興味を有し，極めて熱心に勉強する以て，教えるにも張合いあり，大いに慰められた」[58] という教育状態で，「図画は早くも務本女学堂の一特長となれり」，生徒たちも「半年後には相当日本語に熟達した」という[59]．河原は日本の小学校に準じて，教科を定め，学級を編成し，規律と時間についても厳しく要求した結果，教育の効果がよかった．河原の回想の中に，学堂は「立派な成功を告げました」，「務本女学堂の成功に刺激されて，中国各地に女学校が建つようになりまして，務本の卒業生で，それらの女学校に教習として赴いたのも少なくはありませんでした．確かに務本女学堂は支那の女子教育史の新しい頁を開いたと言えます」[60] と，自分の離れた後の学堂の成功を語っているが，この中に初任教習の河原の貢献もあったと言うべきである．

内蒙古カラチン右旗毓正女学堂の場合，河原は学則の編制から「机腰掛の調製指示」などまでやって，学科としては日本語，日本文，算術，図画，唱歌，体操，家政，編み物などをたくさん担当していた．もっと多くの女子生徒に教育を受けさせるため，園遊会を開き，日本語の勉強を促進するため，同窓談話会を設けた．こうした二年余りの尽力した結果，河原の教育実績は相当優れたものであった．生徒からの日本語の書簡からもわかるように，その日本語の力が高いレベルに達している．生徒たちの日本語や編み物や歴史や地理など具体的な知識の獲得のほかに，内蒙古地方に近代教

育，特に中国ほかの地にも遅れない女子教育の基礎が作られたことに，河原の功績が大きかったのである．これについて，「敝地教化未与人民顽陋，女学尤所未讲，去年曾创办学堂以开风气，唯师范难求，幸令徒河原女史具此热心，不以寒苦肯来教授，感佩之至，兹未年余而进步之速实出意外，将来敝地妇女之输入文明，无非出自先生」[61] とカラチン王妃からも高く評価されている．

ここまで見てきたように，河原はまじめに中国人女子教育のことを考えて，従事していた．中国文化を尊重し，中国人生徒を平等に温かく指導したこと，授業内容と方法の工夫，その最後の教育効果や影響などから総合的に考察した結果，河原は中国の女子教育の発展のために中国に渡ってきて，教育事業を展開した真の教育者の姿を見せてくれたと立証できると思う．

（2）戦争協力者としての河原操子

河原が中国人女子教育のために尽力したことは認められるが，その歩んできた横浜大同学校，務本女学堂，毓正女学堂の三つの教育段階を比べてみると，軍部と東亜同文会の力が入ったことによって，河原の内蒙古における教育活動が単なる「教育支援」の他に，政治的な色合いも見られるようになった．

河原について「女スパイ」の論説がたくさんある．この言い方について，河原自身は「スパイとか間諜とか申しますと，変装でもして敵地に潜入し，敵情を密偵するように聞えますが，私は公然と王宮内に居住を許され，女学堂の教習として堂々と授業をいたし，王並に王妃の親日思想を益々強からしめるように努力し，また特別任務班の方々のために連絡係のお役など努めましたが，実際にスパイというような事は致しませんでした．申すまでもなく，怪しい外人が王府に出入したり，日本にとって不利と認められるようなことを見聞しました際は，決して報告を怠りませんでしたけれども，それは所謂聞込みをご参考までにお知らせする程度のもので，変装した欺瞞の手段によって，相手の秘密を探り出すようなスパイとは違います」[62] と強く否定している．

スパイであるかどうかについて，今公的な記録が残されていない以上，立証は確かに難しいかもしれないが，河原本人の戦争に対する認識，軍部から受けたこの入蒙という「国家的な任務」に対する態度，教育活動の中から見られる国家主義的な言動などを細かく見ていくと，河原の戦争協力者の一面が浮かんでくると思う．

河原は一生の中に日清戦争，日露戦争，第二次世界大戦を全部経験している．日清戦争の場合，前述した女高師の時，「日本軍の連戦連勝」の消息を聞いて，「あの「婦人従軍歌」を毎日のように歌っては，云い知れぬ感激に浸っておりました」とか，「やがて両国間の平和が回復されまして，その年の5月，両陛下が京都の大本営から還御遊ばされましたのを二重橋の前に整列してお迎えいたした」などの行動からも分かるように，河原はこの戦争の支持者であった．

日露戦争と言えば，河原は直接任務まで受けて，戦争の協力者になった．この裏に小学校から受けてきた国家主義教育，日清戦争の時に既に養成された「国に献身する」意志に支えられる精神的な力が不可欠なものであった．横浜や上海の時と違って，「在蒙中この懐剣をいつも肌身はなさず持って居りました」[63] のように，河原はこの任務の危険を最初から感じていた．しかし，「内田公使から初めて任務についてのお話を伺った時も，青木大佐から心得を説き聞かされた時も，尻込みするようなことなく，国家のために尽くすべき千歳一遇の好機と，敢然としてお引受するようになった」[64] のである．また，その受けた理由について，「私の愛国心が特に強かったためではなく，日本婦人であるなら誰でも，このような国家非常の際に，お国にとって大切な役目を申付けられましたら，一身の安危など考えて中途することはないでしょうと存じます」[65] と言っている．国家主義教育の力が如何に大きかったかこの話から分かるだろう．横浜大同学校と務本女学堂の場合の単純な中日親善や東洋平和の目標と違って，入蒙の背後に戦争のための「国家的任務」があった．

こういう「国家のため」という意識のもとで，軍の特別任務班への協力や北京公使館への情報連絡などのスパイと言われる行為も，河原にとっては日本国民としての当然のことであった．これだけではなく，教育活動の場合も河原は「国力伸張」の意識が強かった．「蒙古の女子教育をなるべく日本風に発達せしめて，同地方日本化の根拠地たらしめんがため，女学堂に於いては特に日本語と日本文字の教授に力を注ぎ，日本

唱歌を歌わせ，日本の紀元節，天長節，地久節を休日たらしめ」[66] と言っているように，内蒙古の「精神上の占領」を図っているのである．これは川島浪速の対内蒙古工作の意図，つまり，「蒙古方面から，何らか一種無形の壇壁を築き上げて，ロシアの中原侵入の鋒先を防止しなければならない」，「そこでまず蒙古方面を精神的に占領すること，そして蒙古方面の実力を有する人々を親日主義に誘い込む」こと[67] と本質的には一致している．

因みに，河原は回想録に，後の太平洋戦争について，「大東亜戦争開始以来すでに二年に近く，陸に海に空に戦闘は益々激しくなり，特にソロモン群島方面の空中戦は私共の想像し得られないほど苛烈なものであることを，ラジオで聞き新聞で読みまして，我が将兵の方々に心から感謝しているのでございます」[68] と言っているが，やはり一貫した日本国の戦争行動への支持の立場であった．

おわりに

河原は「憚らず申しますと，支那婦人の教育は私の本職であり，自分から進んで従事した事業ですから，自信もあり，興味もあり，また少女達が日本唱歌を歌い，日本語で上手に話すようになりますと，愛情も自然加わってきますので，私自身も益々熱心になり，それに軍の方の任務は37年の夏頃まで一段落を告げ，後は左程必要がなくなりましたに反し，教育の方は効果がだんだん現れ，王も王妃もお心から満足下され，父兄たちも深く信用してくれるようになりましたので，私も多年の理想がここで大成するものの様に嬉しくなり，場合によっては王妃のご希望通り蒙古に永住してもよく，またその折は父も同伴しようなど考えたこともあるほどですから，入蒙の直接理由は，生命を賭けして軍のお手伝いをするためでありましたけれども，結果から申せば，教育の方が私の本当の事業になっております」[69] と，再三スパイ論を反駁して，自分の教育者の身分を強調している．

今まで分析したように，河原には教育者の姿も認められる一方，その戦争協力者としての一面も入蒙以来の活動の中から発見できると思う．幼い頃から国と家庭の薫陶によって「自然に頭に浸み込んだ」国家主義意識はいざ有事の時，彼女を「国家に献身する」勇気のある人間に変身させた．「国のため」の名のもとに，侵略戦争まで支持できるものになった．

友好平和の意識と戦争支持の意識，真の女子教育者の姿と戦争協力者の姿が河原の身に同時に存在することが興味深いのである．どちらに偏るかによって，河原に対する評価がずいぶん違うものになる．本稿としては，河原が誠心をもって中国の女子教育事業を援助したこと，またその尽力によって，内蒙古の近代的な女子教育が本格的な一歩を踏み出したことをまず首肯すべきだと思う一方，河原の戦争協力者の一面についても，当時の国家主義教育の角度からより深く考えて，認識する必要があると思う．

Received date 2012年12月26日

1）渡辺龍策（1965『女探』早川書房）を代表とする中日両側の研究
2）ウ・ムングンゲレル(2003)(「モンゴル人子女教育に貢献した二人の日本人女性」『旅の文化研究所研究報告』12)，布日其其格（2009）(「内蒙古カラチン右旗毓正女学堂と河原操子について」内蒙古大学修士論文）など．
3）一宮操子（1939)「青春を蒙古に捧げて」『婦人公論』24巻12号，P130
4）河原操子（1969)『カラチン王妃と私』芙蓉書房，P24
5）堀松武一（1959)，『日本近代教育史―明治の国家と教育』，理想社，P145
6）前掲「青春を蒙古に捧げて」，P132
7）前掲「青春を蒙古に捧げて」，P132
8）前掲「青春を蒙古に捧げて」，P131
9）前掲『カラチン王妃と私』，P22
10）前掲「青春を蒙古に捧げて」，P131
11）前掲『カラチン王妃と私』，P23
12）前掲『カラチン王妃と私』，P23
13）前掲『カラチン王妃と私』，P23
14）前掲「青春を蒙古に捧げて」，P131
15）前掲「青春を蒙古に捧げて」，P131
16）前掲「青春を蒙古に捧げて」，P131－132
17）下田歌子は1854年に岩村藩（岐阜県）に生まれた．幼名，平尾鉐．祖父は儒者，父は尊王思想をもつ藩士である．下田歌子は幼い時期から学問詩歌を学び，天資聡明な少女として育った．1872年，18歳で宮中に出仕，昭憲皇太后に歌才を認められ，歌子の名を賜った．1879年，御所を下がり，翌年剣客下田猛雄と結婚したが，4年後夫が病死した．

1885年に皇后の令旨で華族女学校が設立されると，下田歌子は学監兼教授として就任，以来二十年にわたり華族の教育をし続けた．この間，1893年から二年間，皇女教育や先進国の女子教育視察のためヨーロッパへ行った．帰国後の1898年，上流夫人のみの組織ではない広く一般の婦人も含まれる「帝国婦人協会」を設立，さらに帝国婦人協会より雑誌『日本婦人』を発行し，また1899年に実践女学校を設立した．1907年には学習院女子部（旧華族女学校）を辞職し，大衆の女子教育に専念した．1920年には愛国婦人会会長に就任し，広汎な社会事業を展開する．1936年逝去，享年82歳．

18）前掲「青春を蒙古に捧げて」，P133
19）前掲「青春を蒙古に捧げて」，P133
20）前掲「青春を蒙古に捧げて」，P133
21）前掲「青春を蒙古に捧げて」，P133
22）前掲「青春を蒙古に捧げて」，P136
23）明治23年3月の『山県有朋軍備意見』の冒頭に「主権線」「利益線」の言葉があり，山県の「主権線」「利益線」説の出現は日本の対外拡張の「大陸政策」の形成を意味する．
24）康有為の話．陈景磐，陈学恂主编（1997），『清代后期教育论著选』（下册），人民教育出版社，P312
25）梁啓超の話．陈景磐，陈学恂主编（1997），『清代后期教育论著选』（下册），人民教育出版社，P438
26）蔡数道（2009），「東亜同文会の中国教育事業に関する一考察」『中央大学社会科学研究所年報』第14号，P118-119
27）前掲「東亜同文会の中国教育事業に関する一考察」，P132
28）前掲「東亜同文会の中国教育事業に関する一考察」，P132
29）前掲「東亜同文会の中国教育事業に関する一考察」，P132－133
30）川島浪速（1866－1949），東亜同文会会員，1886年上海へ赴き，日清戦争の時，通訳官として従軍．義和団事件の時，日本派遣軍の通訳官として北京に行き，北京警務学堂の校長を就任．北京で清朝皇族肅親王と蒙古カラチン王貢王と親交を結んだ．辛亥革命後，第一次，二次満蒙独立運動を画策．
31）佐々木安五郎，東亜同文会会員，川島浪速の妹婿，1901年頃から内蒙古で活動を展開した．蒙古王と呼ばれていた．
32）内田康哉，東亜同文会会員，当時日本駐清公使
33）小田切万寿之助，東亜同文会会員，当時日本駐上海総領事
34）福島 安正（1852 - 1919），日本の陸軍軍人．川島浪速や河原操子とは同郷．最終階級は陸軍大将．男爵．
35）青木宣純，陸軍軍人，当時日本駐清公使館武官，当時の特別任務班の総指揮官．
36）伊藤柳太郎，陸軍軍人，当時の特別任務班第一班班長．
37）東亜同文会（1981）『続対支回顧録　下』原書房，P199
38）前掲『続対支回顧録　下』，P201
39）会田勉（1936），『川島浪速翁』文粋閣，P94
40）前掲『続対支回顧録　下』，P203
41）前掲『川島浪速翁』，P89
42）貢王，内蒙古カラチン右旗ザサク郡王「貢桑諾爾布」のこと．貢王は1902年に崇正学堂，1903年に守成武備学堂，毓正女学堂を作った．「貢王三学」と言われている．
43）黒龍会（1966），『東亜先覚志士記伝』原書房，P354
44）前掲『東亜先覚志士記伝』，P354
45）前掲『東亜先覚志士記伝』，P354
46）春日行雄（1993），『日本とモンゴルの100年』アジア博物館，モンゴル館，P12
47）前掲『日本とモンゴルの100年』，P12
48）横田素子（2005）「内蒙古カラチン右旗学堂生徒の日本留学」，『アジア民族造形学会誌』5（アジア民族造形文化研究所），P2
49）東亜文化研究所（1988），『東亜同文会史』財団法人霞山会，P360
50）前掲「内蒙古カラチン右旗学堂生徒の日本留学」，P4
51）前掲「青春を蒙古に捧げて」，P132
52）前掲『カラチン王妃と私』，P108
53）前掲「青春を蒙古に捧げて」，P134
54）前掲「青春を蒙古に捧げて」，P134
55）前掲「青春を蒙古に捧げて」，P134
56）前掲『カラチン王妃と私』，P108
57）前掲「青春を蒙古に捧げて」，P134
58）前掲『カラチン王妃と私』，P116
59）前掲『カラチン王妃と私』，P117
60）前掲「青春を蒙古に捧げて」，P140
61）前掲『カラチン王妃と私』，P263
62）前掲『カラチン王妃と私』，P29
63）前掲『カラチン王妃と私』，P23

64）前掲『カラチン王妃と私』，P24
65）前掲『カラチン王妃と私』，P30
66）前掲『カラチン王妃と私』，P252
67）前掲『川島浪速翁』，P93
68）前掲『カラチン王妃と私』，P39
69）前掲『カラチン王妃と私』，P31－32